

谷津干潟自然観察センターの取り組みと課題

Management of the Yatsu-Higata Nature Observation Center and the problems be solved

荒尾 一樹 (習志野市谷津干潟自然観察センター)

Kazuki ARAO (Yatsu-Higata Nature Observation Center)

k-araao@seibu-la.co.jp

東京湾最奥部に位置する谷津干潟はかつて広大な干潟の一部であった。1900 年頃は塩田が広がり、1960 年頃には潮干狩り、海水浴で賑わい、採貝や海苔養殖などの漁業が盛んであった。1970 年頃には埋め立てが進められ、多くの人々による保護活動が行われたが、面積約 40ha の谷津干潟を残し、周囲は埋め立てられた。

都市部に残された谷津干潟にはゴカイ、アサリ、カニなどの底生動物、ボラ、マハゼなどの魚類といった多種多様な生物が生息するため、多くの水鳥が飛来する。特に渡り鳥の中継地として貴重であることから、1993 年にラムサール条約登録湿地に認定された。翌年に環境教育、市民参加事業、谷津干潟の保全、国際交流・ネットワーク事業の拠点として谷津干潟自然観察センターが設立された。

観察センターではレンジャーによる個別案内、自然観察会の開催、展示などを通して谷津干潟の野鳥や自然についての解説をしている。学校などの団体対応、職場体験、インターンシップ、教育研修などの受け入れも行っている。干潟に入り、生物に触れる体験を通して、干潟の大切さや生物多様性を伝えている。

また、観察センターを拠点にボランティア、谷津干潟ユース、谷津干潟ジュニアレンジャーなど多くの人々が活躍しており、観察指導案内、行事支援、環境管理作業などの活動をしている。1997 年に習志野市はラムサール条約に登録された 6 月 10 日を「谷津干潟の日」として制定し、谷津干潟の保全とワイズユースの取り組みに市民の参加を呼びかけている。毎年、行政と地域が一体となり保全を促すイベントを観察センターで開催しており、多くの人々に参加いただいている。

谷津干潟では現在、飛来する渡り鳥の個体数減少、アオサの大量繁茂と腐敗臭の発生、外来種ホンビノスガイの大量発生、干潟の泥分の減少による砂質化・地盤高の低下などといった課題がある。谷津干潟の自然環境が野鳥にとって良好なものとして存続するよう関係機関や団体と協力し、清掃・外来種駆除活動など干潟の保全や生物調査・環境調査といった市民参加事業を行っている。また、生物モニタリング調査を実施し、谷津干潟の良好な環境を継続させるよう環境変化を注視している。現在、増えすぎたアオサやホンビノスガイの賢明な利用方法も模索中であり、今年は試験的に環境保全型潮干狩りを実施している。今後、ラムサール条約の CEPA の特に能力養成の拠点として人材育成を進め、地域協働によって谷津干潟の保全を図っていきたい。

キーワード：東京湾、都市湿地、湿地センター、ラムサール条約、CEPA